

1 自分で箸をとる

社会人たる者は、何よりもまず自分で動かなければならない。これを渋沢栄一は、「自ら箸をとれ」と言った。「何か一と仕事しようとする者は自分で箸を取らなければ駄目である。御馳走の献立をした上に、それを養ってやるほど先輩や世の中というものは暇でない」（「自ら箸をとれ」『論語と算盤』国書刊行会 所収）と語り、無精や甘えを戒めている。

そもそも仕事とは追いかけるものであって、追われるものではない。そのためには、工面と段取りが大切である。工面と段取りの良い者は仕事を早く片付けるが、そうすると次の仕事を持ってこられる。隣の人はのんびりと仕事をしているのに、何で自分だけ忙しくせねばならぬかとの不満も生じるが、仕事は自分を磨き、潜在能力を開発してくれる。

何事もアグレッシブに取り組むことが大切であり、その成果はいつしか己の人生の上に反映されてくる。目先の報酬に惑わされることなく、「仕事は人生に貯金しているようなもの」と考えて仕事に取り組むことが肝要だろう。

自分で箸をとることは現場感覚（実践感覚）を身につけることにもなる。いずれ指導者となった時に、現場の指導や判断に間違いも迷いもなくなる基礎を固めているようなものである。